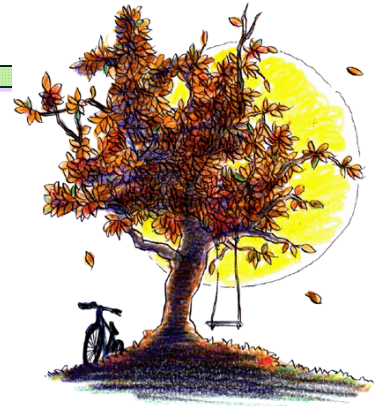


手をつなごう2008

平成20年11月10日
岡山県立東備養護学校
支援部だよりNO. 18

コーディネーター お薦めの本③

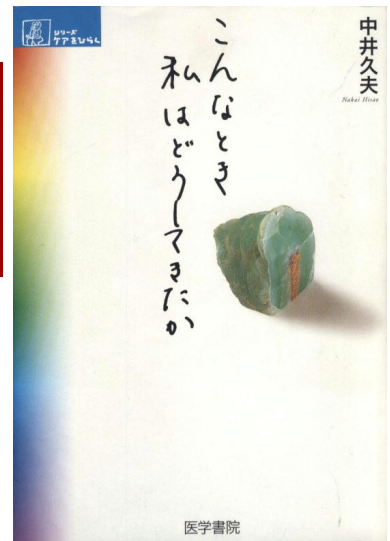


発達障害についての基礎知識や方法に関する本は結構読まれていると思いますので、特別支援教育のジャンルではないのですが、肩の力を抜いて楽しめる本をご紹介します。

《医学書院の「ケアをひらく」シリーズ》

医療、福祉関係者だけでなく、日々子どもたちとかかわる仕事をしている私たち教師にとっても「目からうろこ」的な視点が得られ、かつ十分楽しめるシリーズです。
私の独断では、この医学書院の『ケアをひらく』シリーズは、はずれがありません。
これまでに読んだ『ケアをひらく』シリーズの中からご紹介します。

コーディネーターUのお薦め
「こんなとき私はどうしてきたか」
中井久夫 著
(医学書院) 2100円



精神科医である中井先生は翻訳家・文章家としてもよく知られていますが、医師としてはきわめて実務的な「現場の人」であり「身体の人」でもあります。この本2章の「治療的『暴力』抑制論」は医療現場の臨場感が伝わってきて印象に残ります。コントロールの効かない患者さんを前にした時どうするか、見開き2頁にわたって中井先生自身が大柄なドクターを制しているシミュレーションの写真が掲載されています。最小限の介入で制止することの大切さとともに、その後をどう収めるか、最も大切なのは暴力を必要としない雰囲気を生み出す「予防」だとも述べておられ、「患者さんを『手負い』にしてはならない」という言葉は強烈です。

他にも「患者さんに初めて出会ったときの第一声」「ハト派的患者迎え」等々さまざまなアドバイスが、中井先生のこれまでの臨床エピソードとともに語られています。「話というのは合いの手で勝負」。たとえば、「はぁ」「はっ」とか。「ひいっ」(…は、ちょっとまずいかも。)'「ふーん」「ふしぎだねえ」「へえ!」「ほお」など「ハヒフヘホの合いの手をみがく」。それを「理性」でなく「調子」で使いこなすなんていうのはすごく勉強にもなります。「診断」は「宣告」ではなく、処方するのは「希望」、
「匙を投げないことを伝える」。

中井先生言われるところの「プロ的エレガンス」が、底流に穏やかに流れている本です。

巻末付録の「精神保健いろは歌留多」も妙に楽しめます。

「ち・ちりも積もれば ある日爆発」

「け・今日やりすぎたら 明日は手を抜こう」

「わ・忘れたらそのままにしよう」

